

第1章

学ぶ意欲をはぐくむには

学ぶ意欲の基本的な考え方についてまとめました。

学ぶ意欲とは

学習指導要領が改訂されましたが、今回の改訂においても、「生きる力」をはぐくむという理念が継承され、確かな学力、豊かな心、健やかな体の調和のとれた育成が重視されています。

さらに、確かな学力の構成要素である知識・技能の習得と、思考力・判断力・表現力等の育成とのバランスを重視すること、学習意欲を向上させ、主体的に学習に取り組む態度を養い、家庭との連携を図りながら学習習慣を確立することも改訂の基本方針として示されました。

学習意欲は、基礎的・基本的な知識・技能やそれらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力を高める上での基盤となるものとしてとらえることができます。

ところで、学ぶ意欲とは、一体どのようなものなのでしょうか。

先行研究によると、学ぶ意欲についてはいろいろなとらえ方がありますが、本調査研究では、次のように定義しました。

(※本調査研究では、「学習意欲」と「学ぶ意欲」を同義ととらえる。)

学ぶ意欲とは…

学習者が意思をもって、自発的に学習活動を求めようとする心の働き

○学習活動そのものに対する欲求…「学ぶこと自体が面白い」「知りたいから学ぶ」

○自己実現の手段としての欲求……「よい成績を取りたい」

「希望する職業に就くために学習する」

つまり、**学ぶ意欲**には、「学びたい」という気持ちと、「目標を達成するために粘り強く学んでいこう」という気持ちが含まれます。

(リーフレット「学ぶ意欲をはぐくむ」より 栃木県総合教育センター 平成 22 年3月)

学ぶ意欲をこのようにとらえ、本冊子では、学ぶ意欲が育つ過程や測定法、授業における効果的な働きかけの方法について述べていきます。

参 考

「学校教育法 第30条第2項、第49条、第62条」 (平成19年6月27日公布)

生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うことに、特に意を用いなければならない。

学力の三要素

(中教審答申より 平成20年1月)

- ① 基礎的・基本的な知識・技能の習得
- ② 知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力 等
- ③ 学習意欲

学習指導要領解説 総則編より

(平成20年8月)

個別指導やグループ指導、繰り返し指導、学習内容の習熟の程度に応じた指導など個に応じた指導の充実により分かる喜びを実感したり、観察・実験やレポートの作成、論述などの体験的な学習や知識・技能の活用を図る学習活動、職業や自己の将来に関する学習などを通して学ぶ意義を認識したりすることで学習意欲を高めることが求められる。

学ぶ意欲をはぐくむために、教師は授業をはじめとする様々な場面で、児童生徒に対し、いろいろな働きかけをしています。児童生徒の実態に応じて、より効果的に働きかけるには、学ぶ意欲を構成する要素や学ぶ意欲が育つプロセスに注目する必要があります。

右頁の図は、学ぶ意欲の構成要素や学ぶ意欲が育っていくプロセスを模式的に表したものです。学ぶ意欲をはぐくむ上で土台となるのが「安心して学べる環境」です。学ぶ意欲が発現するプロセスには、「欲求・動機」レベル、「学習行動」レベル、「認知・感情」レベルの三つのレベルがあります。

「安心して学べる環境」のもとで、「知的好奇心」「有能さへの欲求」「向社会的欲求」の欲求・動機が、具体的な学習行動として表れ、その結果として、「おもしろさ・楽しさ」「有能感」「充実感」の認知・感情が生じます。この「認知・感情」は、新たな「欲求・動機」「学習行動」につながります。このように、「安心して学べる環境」のもとで、「欲求・動機」「学習行動」「認知・感情」が循環し、学ぶ意欲が育っていきます。

したがって、学ぶ意欲をはぐくむには、「欲求・動機」「学習行動」「認知・感情」の各プロセスにおける教師の意図的な働きかけが重要となります。

本冊子において、「働きかけ」とは、授業の構想、学習方法、指導方法、言葉かけと、とらえています。

コラム

「独立達成」と「協同学習」について

「独立達成」とは、自分の潜在的な能力を開花させるために、できるだけ自分一人の力で問題を解決しようとする行動です。どうしても一人の力で解決できないときは、教師や友達、保護者等のサポートが必要です。

「協同学習」とは、「向社会的欲求」の影響を強く受けている学習行動です。自分だけでは解決できない問題でも、友達等と協力すれば解決できることもあります。そこで、協力の重要性や学習の効率性の面において、「協同学習」は近年、重要な学習方法として位置付けられるようになりました。

一見、相反する構成要素のように感じられる「独立達成」と「協同学習」ですが、これらを組み合わせ、繰り返すことで、学習の深まりが期待できるのです。



〔各構成要素の解説〕

レベル	構成要素	解 説
認知・感情	おもしろさ・楽しさ	結果に依存しない感情で、失敗したとしても感じる事ができ、知的好奇心が活性化していれば得られる感情。
	有能感	学習行動がうまくいったとき、成功したときに感じる事が多い感情。ほめられることにより、高まることもある。
	充実感	向社会的欲求に基づく動機が達成された場合に感じる事ができる感情。
学習行動	情報収集	主に知的好奇心によって、興味・関心のあることについて情報を集める行動。
	自発学習	自ら進んで学習に取り組んだり、計画を立てて学習をしたりする行動。
	挑戦行動	今よりも少し難しい問題に挑戦する行動。
	深い思考	問題の解決法を複数考えたり、よりよい解決法を考えたり、仮説や考えを自分なりに吟味したりする行動。
	独立達成	できるだけ自分一人の力で問題を解決しようとする行動。
	協同学習	友達と協力して問題を解決する行動。
欲求・動機	知的好奇心	未知のことや珍しいことに興味・関心をもち、それらを探究したいという欲求。
	有能さへの欲求	より有能になりたい、より賢くなりたいという欲求。
	向社会的欲求	社会や人のためになりたいという欲求。思いやりの気持ちとも関連する。

子どもを取り巻く環境には、物的環境と人的環境があります。これらの環境を整備し、安心して学べる環境をつくることが、児童生徒の学ぶ意欲を高める上で重要なポイントです。

まず、教室内外の物的環境についてです。きれいに整理・整頓されていることはもちろんですが、児童生徒が学ぶ場であるという視点が不可欠です。例えば、現在学習している内容に関する本が手に取れるように置いてあることや、資料が掲示されているといったことです。授業で学習したことについて興味や関心が高まったときに、関連する本や資料が目に触れる、あるいは手に取ることができる環境にしておきます。

多くの教室には、児童生徒の学習の成果が掲示されています。こうした学習の成果も、子どものやる気を高めるきっかけとなります。配慮すべき点は、作品が曲がっていたり、折れていたたりしないよう常時点検し、大切に扱われていることが子どもにも感じられるようにすることです。このことは子どもの精神的な安定につながります。

次に、教師や友達などの人的環境についてです。学ぶ意欲をはぐくむ上で、教師は、子どもにとって特に重要な人的環境です。「先生は、自分のよいところを見ている」「温かい目で見守ってくれている」「自分に期待をかけてくれている」と思えることが、学ぶ意欲の土台となる安心感につながります。

一人一人を大切に受け止め、様々な教育活動の中で、子どもを生かし伸ばしていこうとする教師の姿勢は、子どもたちに伝わり、子ども相互の人間関係にも影響を与えます。この点に留意し、学級内の人間関係づくりに努めなければなりません。「発表を真剣に聞いてもらえる」「間違っても、笑われない」など、学級の雰囲気によければ、子どもは萎縮せずに学習活動に取り組むことができます。

教師の受容的な態度と、子ども同士が互いに認め合い高め合おうとする雰囲気が、安心して学べる環境と言えます。

なお、栃木県教育委員会では、学びに向かう集団づくりや子どもが意欲的に取り組む授業づくりの資料として、リーフレット「あなたは、学業指導を知っていますか！（平成21年）」を作成しましたので、参考にしてください。

安心して学べる環境づくりのポイント

〔物的環境〕

○ 学びたくなる環境を整備する

- ・学習している内容の資料を掲示したり、調べる本を教室に準備しておいたりする。
- ・学習の成果が分かる子どものワークシートや作品などを丁寧に掲示する。
- ・作品には、教師からの温かい評価のコメントや友達からの言葉を添える。

〔人的環境〕

○ 子どもの視点に立ち、子どもを肯定的にみる

- ・子どもは「もっとできるようになりたい」などの向上心をもっていることを、教師が認識する。
- ・子どもの姿を丁寧に観察し、発想や考え方、活動の仕方などのよさやつまずきの原因などを見抜き、前向きな言葉かけをする。
- ・予想外の発言に対してすぐに否定するのではなく、その発言に至った理由を聞き、子どもの思考過程の理解に努める。

○ 子どもの意思を尊重し、自発性を育てる

- ・学習のルールを決めておく。ただしルールや型を強調しすぎず柔軟な対応をする。
- ・「やってみたい」「こう学びたい」などの欲求を大切にし、課題の与え方や授業形態の組合せなどを工夫する。
- ・自分の課題を見つけられるように支援し、自分の力で解決させて賞賛する。

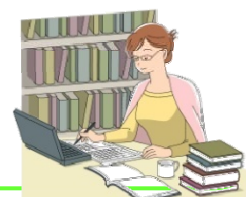
○ 意図的に働きかけて、一人一人の子どもを生かす

- ・学び合う場や協力し合う場を意図的に設定する。
- ・活動の様子を見守り、消極的になりがちな子どもの意見を取り上げるなど、友達のよい考えや長所に気付けるように支援する。
- ・学び合いの様子を丁寧に観察し、取り上げられなかった意見の中によさがある場合には、教師が取り上げ、広めるようにする。



○ 学び続ける姿を通して、学ぶ意義を伝える

- ・教師自身が様々なことに好奇心をもち、学び続ける姿を示す。
- ・自らが関心をもっていること、読書や経験から得たことなどについて子ども達に伝える。
- ・学問、スポーツ、芸術など様々な分野で活躍している人の生き方を紹介する。



子どもの興味・関心、学ぶ理由、目標などは、成長とともに変化していきます。こうした子どもの発達段階や実態を踏まえて、各教師は自らの経験を基に、興味・関心を高めるための働きかけを行っていますが、授業の展開や学ぶ意欲をはぐくむための働きかけには、その教師なりの傾向や特徴があります。

学ぶ意欲をはぐくむ授業づくりを考える際に、p 5に示した「学ぶ意欲のプロセスモデル」が参考になります。学ぶ意欲が育つプロセスに着目し、その構成要素に意図的に働きかけることで、学ぶ意欲は向上するものと考えられます。「欲求・動機」「学習行動」「認知・感情」は密接に関わっているため、一つの働きかけが複数の要素に影響を与えることがあります。また、学ぶ意欲を高めようとして、授業のねらいの達成を目指すことから外れないように留意する必要があります。

そして、教師が子どもの学習の様子を見守りながら、状況に応じて教師による言葉かけを工夫したり、子ども自身による振り返りを行ったりすることが重要です。

（１）授業における働きかけ

学ぶ意欲のベースとなるのが、「知的好奇心」「有能さへの欲求」と言われています。この二つに働きかける授業を構成すれば、子どもは興味や関心をもって学習に取り組むことができると考えられます。

◆ 分かる授業ではぐくむ

学ぶ意欲をはぐくむ上で、「分かる授業」を行うことは必要不可欠です。教師の説明をよく聞いていれば理解できるという授業ばかりでなく、実験したり、考えたり、話し合ったりしていくうちに、「最初は分からなかったことが、分かった」といった場面を、多く設定することが大切です。子どもが体験や努力をして分かるような授業をすることにより、「もっと知りたい」「もっとできるようになりたい」などの欲求を引き出すことが可能になります。



◆ 実生活と関連する授業ではぐくむ

身近な事柄と関連のある授業は、子どもの興味・関心を高めます。また、学習したことが生活の中でどのように使われているかを考えさせたり、見つけたりさせることで、学習したことが生活に役立つことを実感できます。すると、学んだことを家庭で話題にしたり、再び学習に取り組んだりして、学びが深まっていくことが期待できます。

各プロセスへの働きかけ（例）

認知・感情への働きかけ

学習の成果の確認（充実感、おもしろさ・楽しさ）

- ・学習したことを作品、ポートフォリオなどにまとめさせ、学習の振り返りができるようにする。

ポジティブな個人内評価（有能感）

- ・教師から作品のよさ、個人内の伸びなどよい面への評価を与えるとともに、自己評価をさせる。

学習行動への働きかけ

応用・発展の課題（挑戦行動）

- ・応用・発展の課題を提示し、自分で工夫して学習させる。

学び合い、教え合いの場（深い思考）

- ・友達との考えを比較する場を設定し、様々な見方、考え方に気付かせる。

子どもが主体的に学ぶ場（自発学習、情報収集）

- ・課題や学習方法を選択させ、次第に自ら課題を見いだせるように指導する。

自己決定・自力解決の場（独立達成）

- ・目標を決めさせる。
- ・みんなで考えたことを元に、自分でまとめさせる。

欲求・動機への働きかけ

自分の特性や長所の自覚（向社会的欲求）

- ・様々な体験活動や自己評価・相互評価などを通して、自分の特性やよさに気付かせる。

児童期からのキャリア教育（向社会的欲求）

- ・社会で活躍する様々な人に目を向けさせ、夢や目標をもたせる。

めざす姿や作品の提示（有能さへの欲求）

- ・作品や演技など、めざす姿や形を例示し、実現のための具体策を考えさせたり、指導したりする。

学習の見通しをもたせる（有能さへの欲求）

- ・単元の学習の見通しをもたせて励まし、「自分にもやれそうだ。」というイメージを抱かせる。

子どもの生活実態と教材との関連

（知的好奇心）

- ・子どもの興味や日常生活と教材を関連付ける。

疑問や意外性を生み出すしかけづくり

（知的好奇心）

- ・「なぜ」「えっ、そうなの」など、疑問や意外性を感じさせる場面を設定する。

（２）学習状況に応じた言葉かけ・振り返り

◆ 教師による言葉かけ

学習活動中のタイミングのよい励ましの言葉は、子どもに安心感を与え、学習の推進力となります。励ましを受けたことで、一人でやり遂げようとしたり、多くの問題に挑戦したり、別の方法で解こうとしたりするなど、自ら学習を進めていく力を得ることがあります。

また、授業の終わりや単元末では、子どもが「おもしろさ・楽しさ」「有能感」「充実感」などを感じられるように、肯定的な言葉かけをすることが大切です。

子どもは、その子なりの発想をもっており、それが認められることによって、知的好奇心が高まります。教師は個性的・多面的な発想を受け止め、認めるように心がけることが大切です。

効果的な言葉かけについて学ぶには、校内で授業を観察し合い、教師の言葉かけに対する子どもの反応等を、授業研究会等で話し合うことが有効です。

◆ 子どもの振り返り

子ども自身による振り返り（自己評価）では、適切な目標をもたせること、学習状況を適時に振り返らせることが大切です。このことが、「有能感」や「自分で自分を励ましながら学習する力」を育てることにつながります。

また、目標を明確にし、学習のゴールを意識させることで、「自分にもできそうだ」という見通しをもつことができるようになります。

小学校の高学年の頃から、子どもは徐々に客観的な自己評価ができるようになります。自分の学習状況をモニターして、うまくいっていない場合は軌道修正をし、目標が達成できるように学習を進めていく調整能力も発達してきます。中学生になると教科の得意・不得意がはっきりしてくるため、努力してもすぐにはよい結果を得られないことが増えてきます。そこで、昨日の自分と比べて、「努力してこれだけ伸びた」という実感、つまり、自己の成長に基づく有能感を大切にします。授業の振り返りをさせ、それに対して教師が共感、賞賛するなどして、適切に自己評価できるように支援していきます。

例えば、極端に自分に厳しい評価をする子どもには、「あなたは、～をがんばっていましたね。今日の目標は達成できましたね。」などと、教師が観察した学びのよさを伝えましょう。

教師による言葉かけと、子どもの振り返りの例を次に示します。実際の授業の場面では、このような言葉に授業の内容に関わる具体的な言葉が加わります。

教師による言葉かけ（例）

- ・よく考えたね。目の付け所がいいね。
- ・実におもしろい発想だね。なかなか思いつかないよ。
- ・その方法でいいよ。最後までがんばってみよう。
- ・すごいね。あなたは、〇〇が得意なのね。
- ・粘り強く取り組んだから、分かりやすくまとまったね。
- ・このグループは話合いで前向きな意見が出せたから、いい作品に仕上がったね。
- ・この調子で取り組めば、目標が達成できると思うよ。



「何がどのようによいかということ」を伝え続けると、子どもに適切な自己評価能力が身に付いていきます。

子どもの振り返り（例）

- ・自分で計画し、調べてまとめられた。
- ・友達に解き方を教えることができた。
- ・友達の助言を参考に書き直したら、分かりやすい文章になった。
- ・この部分はできなかったけれど、あと一歩だった。もう一度確認して、次はできるようにしよう。
- ・難しい問題があったけれど、最後まであきらめずにがんばれた。

自己強化

成長するにつれて、課題が難しくなるため、自分で自分を励まして学習していく力が必要になります。成功したときに自分をほめ、失敗したときに自分を励ます能力を高めるように支援することが大切です。心理学では、これを「自己強化」の能力と言います。

アトランタ五輪で、女子マラソンの有森裕子さんがゴールしたときにおっしゃった「自分を自分でほめてあげたい」の名言は、「自己強化」から生まれたものと考えられます。

学ぶ意欲を高めるための方策や手立てを考える上では、学ぶ意欲の状況を把握していることが必要です。状況を的確に把握することで、授業の改善や個に応じた指導が可能になります。

学ぶ意欲を測定する代表的な方法には、「観察法」「面接法」「質問紙法」があります。授業や単元の展開に応じて、選択したり、組み合わせたりして効果的に用いることが大切です。

また、子どもがどのように感じているかを、授業評価や面接などから把握し、指導の内容や方法について検証することも必要です。

◆ 学ぶ意欲の3つの測定法

○ 観察法

日々の授業で行われている最も基本的な方法です。自分だけではなく、同僚による観察も重要です。

「自分の力で問題を解こうとしているか」「課題を解決したら、難しい問題に取り組んでいるか」「新しい情報に興味を示しているか」などの観点を意識して観察することが大切です。

○ 面接法

教師が必要と思う内容を詳しく調べることができ、家庭における意欲なども含めて、子どもを多面的にとらえることができます。正しい情報を得るためには、信頼関係を築いていることが必要条件となります。

○ 質問紙法

子ども自らが認識している学ぶ意欲の程度を質問紙を用いて調べるもので、短時間に多くの子どものデータが得られます。個人や学級全体などの数値から、傾向を把握して指導にあたることができます。また、複数回実施することで、変容を把握できるため、教師の働きかけの効果の検証にも活用できます。

質問項目（例）

レベル	要素	質 問 項 目
安心して 学べる環境		授業でわからないことがあると、先生に聞くことができる。
		先生は学習のことについてほめてくれる。
		学校では、落ち着いて学習している。
		クラスは発言しやすい雰囲気である。
欲 求 ・ 動 機	知的的好奇心	よくわからないことは、わかるまで調べたい。
		疑問やふしぎに思うことは、わかるまで調べたい。
	有能さへの 欲求	自分がもっている能力をじゅうぶんに発揮したい。
		もっとかしこくなりたい。
	向社会的 欲求	社会のために役立つような人になりたい。
		思いやりのある人になりたい。
学 習 行 動	情報収集	興味のあることは調べずにはいられない。
		わからないことがあると、いろいろな方法で調べている。
	自発学習	テストがあれば、自分で計画をたてて勉強する。
		自分から勉強に取り組んでいる。
	挑戦行動	今までよりも、むずかしい問題に取り組むことが多い。
		むずかしい問題にであうと、よりやる気がでる。
	深い思考	もっとうまい解き方や別の考え方はないかと考える。
		授業では友だちと話すことで、より深く考えることができる。
	独立達成	できるだけ自分ひとりの力で課題を解決しようとしている。
		むずかしい問題にであっても、かんたんには先生や友だちの助けは求めない。
認 知 ・ 感 情	おもしろさ 楽しさ	いろいろなことを学ぶことは楽しい。
		失敗しても学ぶことはおもしろい。
	有能感	勉強面では友だちからたよられていると思う。
		自分は勉強がよくできるほうだと思う。
	充実感	毎日、明るく元気に生活している。
		毎日の生活が充実していると感じている。

* この質問項目は、筑波大学大学院の櫻井茂男教授の研究によって得られた尺度により設定したものです。

学ぶ意欲をはぐくむ方策の一つとして、校内研修を充実させることが考えられます。例えば、学ぶ意欲の質問紙調査を行い、その結果を分析して課題を見出したり、子どもへの働きかけのアイディアを出し合ったりすることは、授業改善に大いに役立ちます。

教師は、個々に工夫をして意欲を高めるための働きかけを行っています。その働きかけが有効かどうかを、検証することが必要です。そのためには、互いに授業を公開し、授業研究会や話し合いを通して、気づきを得ることも重要です。

このように、学校全体で学ぶ意欲の向上に取り組むことが大切です。具体的な校内研修のプログラムについては、第4章で紹介していますので参考にしてください。

〔期待できる効果〕

- 一人一人の生徒を多面的にとらえられる。
- 授業研究会を通して、授業を振り返り、改善に生かせる。
- 協議する中で、授業の見方を学べる。
- 学ぶ意欲の構成要素に着目することで、授業を見る視点が增える。
- 構成要素に着目し、複数の目で見ること、見えにくい学ぶ意欲が把握しやすくなる。



〔学ぶ意欲に関する校内研修計画例〕

月	内 容	方 法・備 考
5	学ぶ意欲の理解と自校の課題把握	・リーフレットの読み合わせ
5	第1回アンケート実施と入力作業	・センターホームページよりダウンロード
6	アンケート結果の分析と指導目標設定	・アンケート結果の分析 (講師または学習指導担当)
7	学ぶ意欲の働きかけの工夫	・働きかけについての協議
9	指導案検討	・学ぶ意欲の視点を盛り込んだ授業構想
10	研究授業、授業研究会	・授業の観点を設けた授業研究会
11	第2回アンケート実施と入力作業	・指導目標の見直し
2	成果と課題の確認	・次年度の学校課題設定